

2021, 2022 年度 UPLB 農学英語コース受講者の声

2022 年度 (派遣) 「恥の文化を恥じる」

応用動物学コース1年 A.O.

皆さんはフィリピンと聞いて、どんな国を想像しますか？私が留学に行く前、フィリピンと聞いて想像していたことは、バナナの生産が盛んということだけでした。

この留学に応募したきっかけは、私は将来海外で働きたいという夢があり、その夢を叶えるにはどのくらいの英語力が必要なのか、今の自分の英語能力はどのレベルにあるのかということを知りたかったからです。また、私の頭の中でフィリピン=バナナという方程式が成り立っていたため、それ以外の魅力、文化を体験したいと思ったからです。

この留学プログラムでは、自分の英語能力を認知し、向上させることができました。さらに、書き出すとキリのないくらいたくさんのフィリピンの文化を経験し、たくさんの友人を作ることが出来ました。

授業では、主に発音とコミュニケーションを学びます。特に印象に残っている授業はプレゼンテーションスキルを学ぶ授業です。プレゼンテーションをするためにはボディランゲージが必要でした。ボディランゲージはプレゼンテーションをより印象深いものにします。これは日本語ではあまり重視されていない点であり、英語を話しながら、且つ意味のあるボディランゲージを加えるということが非常に難しかったです。先生方はその難点をどのようにして克服するかを詳しく解説してくださいました。最終の授業で二つのプレゼンテーションを行ったのですが、どちらも自分の最高のパフォーマンスをすることができ、これらのスキルは日本では絶対に学ぶことが出来ない点だと思いました。

Guided Interaction (GI) は日本人4人とファシリテーターの学生2人とグループになります。GIのメンバーで放課後や休日に街に出かけたり、大学内でピクニックをしたりしました。街に出た際は Jollibee (現地一番有名なファストフードショップ) に行ったり、カフェに行って様々な話をしたりしました。フィリピンと日本の違いといったアカデミックな内容から、好きなもの、音楽といったプライベートな内容もたくさん話しました。印象に残っているアカデミックな内容としては、彼らは性(LGBTなど)に対してオープンであり、それは一人一人の個性だという風にとらえていたことが印象に残っています。日本ではまだこの考えは深く浸透しておらず、これらは見習うべき点だと思いました。また、彼らは政治や宗教、経済に対しても自分なりの考えを持っていることに驚きました。たまたま私の留学期間中に年に一度のプロテストという大規模な行事が行われていました。そこでは、学生一人一人が自分の戦っていること(例えば、男女差別など)をプラカードに掲げ、声を上げていました。ファシリテーターに事情を聞くと、彼らは有権者としてとても意識が高く、自分たちが声を上げているからこそ政治が成り立つと考えていました。また、声を上げているからと言って左翼や右翼などといった偏見は一切ないと言っていました。これも日本と大きく違う点であり、彼らの積極性を見るほど、日本の若者の政治離れをより実感しました。プライベートな内容では、日本の文化が深く浸透していることに驚きました。彼らは私の知らない日本のアニメやドラマを知っており、また片言の日本語も知っていました。GIのメンバーとは今でも親交があり、定期的に連絡を取り合っています。GIはフィリピンの学生と形式的で一時的な友好関係ではなく、持続的で深い友好関係を築いてくれるきっかけにもなりました。

ナイトセッションでは二人のチューテントガーディアンが私たちの課題や復習のサポートをしてくれました。授業の復習をしていた時分からないことはすぐに二人に質問でき、学習が充実しました。また、課題のない日はミニゲームをして楽しみました。積極的に話しかけて仲良くなったため、この二人とは今でもSNSで交友関

係が続いています。チャットでは真剣な内容も話したり冗談をも言い合ったり、彼らは私にとってフィリピンの兄、姉のような存在となっています。

UPLB 研修では授業以外にも3つのトリップがあります。特に印象に残っているのはマニラトリップです。インターモロという、スペイン占領時代に建てられ、太平洋戦争のマニラ市街戦の激戦地となった場所を訪問しました。太平洋戦争中に日本軍が地下牢として使用していた場所では、日本軍に反抗したフィリピン人たちが捕えられていました。しかし、アメリカ大陸に對抗する市街戦において地下牢のフィリピン人たちは放置され、600人も犠牲者が出たそうです。その遺構には日本軍とフィリピン人の人形が置かれ、当時の状況が再現されていました。日本で広島や大阪空襲の被害場所を見学したことは多々ありましたが、加害場所として訪問したのは人生で初めてでした。日本人の行った痛ましい過去を見つめることが出来、反戦の気持ちを強く持ちました。また、この歴史に対してGIの二人に「日本人の事を恨まないのか」といった趣旨の質問をしたところ、「それは過去にあったことで今のあなたたち(日本人)がしたことではない。私たちは日本の事が大好きだし、スペイン、アメリカ、日本、フィリピンの4色の歴史があるのは私達の国だけだからそれはユニークじゃない?」と答えてくれました。その答えを聞いたとき、どこかで少し救われたような感情を持ちました。マニラトリップではほかにも博物館などを訪れました。自然科学分野の建物の見学をしたため、農学部生、理学部生にとってとても充実したものになりました。

最後に、食生活の違いについて紹介したいと思います。サラダカントリーの方々から用意していただいた食事はフィリピン料理で、味付けは日本に比べて甘めになっています。食材は日本の夏に食べるものと差ほど変わりありません。魚介も用いられますし、ショウガを用いた料理も多く出ます。時にはココナッツで炊いたご飯も出てきました。とても甘かったです(苦笑)。食事は右手にスプーン、左手にフォークを用いていました。最初は抵抗感がありましたが意外と使いやすいのです。訪れた際はぜひチャレンジしてみてください。



マニラトリップ、マニラ大聖堂前と国立自然博物館にて (3月15日)

私はこの研修で、カラオケクイーン、best pronunciation and presentation、NO.1 student の三つの賞をいただきました。この三週間で振り返ってみると、私は常に英語を話そうという努力をしていたと思います。授業で質問された際には積極的に手を上げ、GIやナイトセッションでも積極的に学生たちと話をしました。日本では積極的に何かをした結果失敗するかもしれない、失敗したら恥ずかしい、周りに冷やかされる、といった風潮があり、いつも尻込みしていました。実際、一日目の授業を受けた際、私はそのような意識を持っていたため、先生の質問に対してうまくこたえられるかからず手を上げる機会は少なかったです。しかし、一日目の授業の放課後にGIで学生と話している時に、少し間違った文法で話しても彼らはちゃんと答えてくれて会話が成立したことに気づきました。自分の英語は通じるのだと感じました。それからは「完璧に伝える」ことではなく、「伝えようとする」ことに焦点を当てて生活しました。伝えようすると、必然的に表情も豊かになりボディランゲージもつきました。発音のミスがあれば彼らは聞き取れないため、発音のミスがあればそれも勉強することが出来ました。また、先生の質問に答える際も、質問の内容を詳しくしてもらったり、違う言い回しを考えたりなど、英会話において実践的なスキルを身につけられたと思っています。何事も失敗を恐れずに積極的に挑戦した結果、この3つの賞を頂けたと思っています。

この留学を充実させられるかどうかは、私たちが今まで培ってしまった「恥の文化」を如何に消し去り、失敗を恐れず積極的に行動することにかかっていると思いました。この三週間で私は上記以外の経験もたくさんすることが出来ました。みっちり三週間英語漬けの生活を送ったことにより、英語を話すことにも自信がつかしました。そのため、将来海外に赴き仕事をするという夢に対してもより鮮明なビジョンを得ることが出来たと思っています。また、この留学ではかけがえのない友人たちも多くでき、一生の思い出となりました。今後のBATCHに参加する皆さんが充実した留学生活を送ることを願っています。

2022年度(派遣)「迷ったらやってみよう!迷ってなくてもやってみよう!」 応用動物学コース1年 Y.H.I.

僕はフィリピンのUPLBという大学で3週間英語を学んできました。このプログラムでは現地の方々との交流を通して自身の英語能力を向上させるだけでなく、交流を通して日本との様々な文化的差異を学ぶことができます。

海外経験が初めての僕にとってそれらはすべて新鮮で一生モノの財産になりました。

まず僕がこのプログラムに参加しようと思ったきっかけは2つあり、1つは英語をもっと学んでみたいと考えていたからです。これまで受験などでさんざん英語を学習する機会にはありましたが、それらは筆記中心で実際のコミュニケーション、例えば発音などはほとんど学習することはありませんでした。また海外の方と英語で会話をした経験もほとんどなく、自分がきちんとした外国語としての英語を学んでいるのか不安がありました。そんな中で、英語がネイティブというわけではないけど、幼いころからの学習によりネイティブレベルの英語力があるフィリピンで、発音など基本的な英語のスピーキングスキルを磨くことができるこのプログラムを見つけこれだ!と思いました。そしてもう一つの参加のきっかけは、海外に行ってみようという単純な好奇心があったからです。先述の通り僕は海外に行ったことがなく、外国という場所は未知の世界でした。いろんな人種の人がいるような気候・建物・食べ物がある、そんな英語を勉強していく中で感じる日本との違いはとても興味深く、いつかそういったものを実際に自分の目や足で感じ、触れてみたいと思っていました。こういったなかでUPLB 農学英語コースは様々な体験ができ、僕のやりたいと思っていたことをなせるプログラムだったのでチャレンジしました。

では僕のやりたかったことについてですが、それは英語で外国の人とコミュニケーションが取れるようになる、ということと、外国の友達をつくるということです。これから社会に出ていくうえで日本語しかしゃべれないというのは他と比べて大きなディスアドバンテージになるかもしれない、世界的な共通言語である英語を自分の一つのコミュニケーションツールにする価値は高いと感じます。日本国内で働くにしても

仕事そのものは外国の人とともにする場合もあるし、その傾向が今後強まる可能性は十分あると思います。僕は別にそんな社会でハイクラスにのし上がってやろうとか、そんな気があるわけではないけど、この社会に出る前の最後の大学生という段階で英語という武器を手に入れておきたいなと思っていました。また、思い出という面で日本だけでなく、外国の友人が欲しいなと思っていました。日本でも様々な価値観を持った人がいて、そんな人たちの関わりは自分の世界を広げてくれますが、同じ国、特に日本という島国で、学習しにくい言語が公用語となっているこの国に住んでいる以上、ある程度はその価値観にまともりが出てきてしまうように感じます。そのため日本とは異なる価値観を持った外国の人と友人になり、その違いを体感していくことがこのプログラムで達成したい目標・目的の1つでした。



Salad Country 提供の朝食風景

このプログラムが終わった今、僕はそういった目標を十分に達成することが出来たと感じています。英語で現地の人々と言葉を交わし、意思疎通や意見の交換を行ったり、また、彼らと友人になり今でもSNSを通じて連絡を取りあったりもしています。3週間という期間を本当に有意義な期間にすることが出来ました。今、特にその時間を振り返って感じるのは、もっと自分に自信をもていんだということです。僕は留学前自分がどう思われているのかを気にしすぎて行動に移せなかったり、自分を出すことをためらってしまったりということが多くありました。周りの人に嫌われたらどうしようとか、失敗したらどう思われるのかなとか、自分でもそんなこと考えただけでどうしようもないってわかっていても考えすぎて、結局うまくできないというのが大体のパターンでした。ただこのプログラムの中で、初めて会うのにまるでずっと昔からお互いを知っている大親友のようなテンションで話しかけてくれる現地の友人や、いろいろな考え方がある中でそれらを互いに尊重し、何か失敗したって挑戦したならそれでいいじゃないかという環境に置かれることができ、自分に胸をはれるようになったと思います。これはきっといくら日本でいろんな経験を積んでも得られなかった、似たようなものがあってもこれはこれだけの特別なものなんだろうと感じます。一番そう考えることが出来るようになったのは、日本人4人、現地の大学生ボランティア (facilitators) 2人と班になって、1日の授業終わりに彼らと数時間大学の近くを散策するGuided Interaction (GI) の時間中にあった例をだすと、初対面で多少の距離感をとる僕 (僕たち) に対して、ファシリテータの人達は、壁なんて少しも感じないような雰囲気であってくれ、そんな彼らと一緒にいることでこんな感じでもいいんだって思うようになることができたということがまずあります。生まれ育った国も言葉も見た目も違うのに、出会った時点でもう友達じゃんという調子で、いきなり冗談を言ってきたり、ほんの1時間しゃべっただけの日でも、1日の終わりにはSNSで今日はありがとう!体調に気を付けてね!とかそれに続いて今日の話したことについてもっと会話がなされていったりと、本当に日本とは全然違う人間関係を体験しました。やっぱり僕は日本人の国民性からか、どうしても遠慮という何かに対して億劫になってしまいがちです。ただ、そうじゃない積極性のようなものも時には重要で、それが足りていないものだった僕にとって、少しだったかもしれないけど、それを手に入れることができました。また、彼らとLGBTについての話をしたこともすごく印象に残っています。多様な性を尊重しようという流れが社会にあったとしても、マイノリティ側は肩身が狭いことに変わりはなく、そ

んな中で自分を出すという選択をしていく勇氣には本当に感銘をうけました。ただ自分が好きなもの・人というものが社会的に受け入れられにくい人いるというのは理解しているつもりだったけど、実際のその立場の人と出会い、その本当の意味を少し知れたと思います。その当人にしかわからない事とか、どうしようもない理不尽を突き付けられることがいっぱいあっても、前を向こうとする姿勢は、僕のこれをこうしたらどう思われるのかなとかいう躊躇がいかにかちまけなもののなかという価値観を変える大きなきっかけになりました。

あともう1つG1の時間で印象的だったこととして、飲食店で食事をしていると小さい子がお金や食事を求めてくるということです。これは日本ではまず体験しないことで、初めてそれが起こった時はびっくりというより怖いなという風に感じました。もちろん断ったし、現地の人も絶対というレベルで断るそうですが、スラムやそれに近いような環境で一日何十円何百円で暮らしている人たちにとっては、そのごくまれに得るわずかな利益のためでも、そういった行動をしなければ生きていけないそうです。これを見ると僕は当たり前前に衣食住が確保されていて、それ以外のことで悩んで人生がどうか言ったりしますが、それがいかに恵まれているのかということが分かりました。今まで世界では食料などの偏配がおこっており、どうにかしなければならぬと何度も習ってきましたが、これといった当事者意識は持たずく忘れていたというか、あまり関係ないと見ないふりをしてきていました。ただそうあまり関係ないと思えるのは不平等で得をしている側だからなんだなと思います。今日の食べ物に困っている人たちからしたら、肥満なんてほとんどありえない世界線で、食品ロスなんてもってのほかなはず。今回どこに生まれるかという運要素しかないようなところで、こんなにも大きな違いが生まれているというのを目の当たりにし、農学部生としてより深くそういった問題に目を向けられるようになったかなと感じます。



Villa Escudero の水上レストランの前(3月5日)

これを読んでいて、プログラムへの参加を迷っている人たちに、このプログラムのおすすめポイントを紹介したいと思います！正直プログラムの全部があなたを変えてくれるし、かたがえのないものになると思うので取舍選択するのナンセンス感はあるけど、あえて2つピックアップします。それはG1と授業です。まずG1では一緒にカフェに行ったり、ジブニーに乗ったり、スバに行ったりと楽しいことをたくさんできます！さっき書いたとおり、facilitators のみんなはとても明るく気さくで一瞬で仲良くなれるので、1日目から本当に楽しいです。なかなか慣わりづらいかもしれないけど本当に楽しいです！休日は予定が合えば丸1日一緒に遊ぶことが出来て、平日には行けないような少し離れたショッピングモールとかにいけます！3週間という短い間だけこれ以上ない濃さの体験ができます！あと、G1の時間を過ごす中で文化的な違いを感じられるのもおもしろいです！まあとにかくこのプログラムの最大の魅力はG1だといえるくらい最高のものです！もう一つは平日の行われる授業です！ここでは発音を一から学ぶことが出来、LとRの発音など日本人が苦手としているものもきちんと練習することが出来ます。やっぱりなれない発音は習得するのに

苦労しますが、これを克服すればカッコいい発音ができるようになります！あと各授業で最低一回はクラスの前で何か発表をするので、人前で話す苦手意識もなくせます！僕は人前で話すのがすごい苦手、前に立って視線を向けられると全然何もできなくなるタイプでした。けど今なら適度な緊張感で身振り手振りなど発表のクオリティをどう上げていくかということにも気を向けられるようになりました！

まとめとしてこのプログラムは僕にとってものすごく価値のあるものとなりました。これからの大学生活とかそんなスケールじゃなくて、人生全体の中で大事にしたい価値観とか、思い出をえられたと思います。様々なかたちでこのプログラムを支えてくださった方々、ありがとうございました。今回、このプログラムでえたことを胸にこれからまたいろいろなことを挑戦していけたらなと思います。これを読んでいるそこの君！まあ細かいことは置いていったんこのプログラムに参加しよう！心配事とかはまあ何とかなるし、ならなくてもそれ以上に楽しくて最高のことがいっぱいあるよ！迷ったらとりあえずやってみよう！！迷ってなくてもやってみよう！

2022年度(派遣)「逆ホームシックの誘い」 応用動物学コース2年G1

私は留学を終えて3日後にこの体験記を書いているところですが、今すぐフィリピンに戻ってしまいたいと思う程、さみしさや懐かしさ、言い換えれば、逆ホームシックのような感情が湧き出ています。それほど、留学で過ごした毎日は楽しく、刺激に溢れており、たくさんの思い出ができました。

例えば、私は、フィリピン人・日本人を含めた学生同士の交流が印象に残っています。現地では、放課後に日本人4人、ファシリテーター(フィリピンの大学生)2人のグループ単位の行動(G1)をします。ファシリテーターの皆さんはとてもフレンドリーに話しかけてくれて、最初から距離を縮めやすかったです。G1での楽しい思い出はたくさんあり、どの経験も日本には絶対にできない経験でした。大学周辺のレストラン、スーパー、カフェ等様々な場所に連れて行ってもらったり、ジブニー(フィリピンのバス)に乗ったりし、一緒におしゃべりをして楽しい時間を過ごしました。キャンパスが見下ろせる秘密の場所に連れて行ってもらったこと、フィリピン出発前夜にキャンパス内の公園で話をしたことは特に印象に残っています。私たちのファシリテーターの一人はとても面白い人で、教授のような雰囲気から他のファシリテーターには professor と呼ばれていながら、カラオケの時にはノリノリで美声を響かせるというギャップのある人でした。そのファシリテーターからは、“Everything starts from nothing” という意味のタガログ語の格言を教えてください、慣れない環境で学んでいる私たちを気遣い、励ましの言葉も何度ももらいました。ファシリテーター連中は、忙しい中(フィリピンの学生は宿題が多く、睡眠時間3時間の日もあるそうです)3週間を共に過ごし、楽しい経験をさせてくれて、感謝の気持ちでいっぱいです。

私が留学した動機は、前年にオンライン授業で知ったフィリピンに実際に行ってみようと思ったからで、留学の目的は、英会話力を向上させること・フィリピンの文化を体験することでした。Batch14の多くの人と違い、私は昨年度(2021年度)にオンラインで行われたUPLB 農学英語プログラムにもBatch13として参加しました。昨年のオンライン授業では、正しい発音をするための口の動かし方や、難しい言葉を使おうとせず言い換えて話すことの重要性を知ることができ、非常に有意義な経験でした。一方で、せっかくフィリピン文化をオンラインで紹介してもらってもコロナのために現地では体験できないことに不満も感じていました。いつか、画面越しでは知れなかったフィリピンに行ってみよう、と思ったその1年後、コロナの落ち着きと先生方の御尽力でリアルでの留学が復活し、今回現地に行くことができました。同じ留学プログラムにオンラインでもリアルでも参加した人は、珍しいと思います。そんな、2種類の留学を経験した私が感じたのは、リアル留学でしかできない実戦経験の重要性です。オンライン留学と違い、リアル留学では、教室の外も英語が飛び交っています。そして、フィリピンの方々と面と向かって会話をすることができます。日常生活の中で実際に英語を使ってコミュニケーションすることは、「英語を使って

こんなことが出来た」という自信や、自分に何が足りないかという気づきを与えてくれます。こうした自信や気付きはリアル留学だからこそ得られるものだと思います。ジョリビー（フィリピンのファストフード店）で注文をすること、ハンカチ落としのルールを説明すること、恋バナ好きのフィリピン人と好きなタイプについて話すこと、レジデンスの部屋の鍵が折れてしまい新しい鍵が必要だと伝えること…これらは全て、留学の中で私が英語で行ったことです。向こうに行くと、毎日予想外の状況が待ち構えています。3週間の英語の実戦経験は、私に自信、気付き、敗北感、様々なものを与えてくれました。いきなり実戦に挑むことに不安を感じる人もいるかもしれませんが、私は最初、このプログラムに参加するかどうか散々迷いました。「初めての海外渡航だが、向こうで3週間もやっていけるだろうか」、「再びこのプログラムに参加することで、何を得られるだろうか」、「費用に合うだけの体験をできるだろうか」、等悩んだ点は様々です。しかし、留学を終えて帰ってきてみれば、参加して本当に良かったと思っています。海外渡航は初めてでしたが、先生方に手厚いサポートをしていたので、手続きで特に困ったことはありませんでした。現地で困ったことがあっても、フィリピンの方々と日本人の友達に助けられました。金銭面でも、アメリカやヨーロッパなどの他の留学先と比べて安く済むうえ、奨学金をいただくこともできました。そして何よりも、現地の方々と交流など日本には決してできない多くの貴重な経験を経験することが出来ました。参加を迷っている人は、迷うくらいならぜひ参加してください。コロナ禍真っ只中の頃と違い、皆さんにはリアル留学ができる機会が与えられています。せっかくの機会に思い切ってチャレンジすれば、様々な学びと最高の体験をできます。そして、逆ホームシックになるほど、留学を楽しんで欲しいと思います。

以下では、私が3週間の実戦経験を通して実際にどんなことを課題として感じ、感じたことを今後どう生かしていこうと思ったか、私自身の再確認の意味も込めて書いていきます。

英会話に関しては、1つ目に、瞬発力の重要性を感じました。フィリピンの授業では生徒が発言する機会がとても多く、「formal phrases と informal phrases の違いは?」、「この文章を皆の前で読んでくれる人は?」、「“Break a leg” を使った例文は何かありますか?」等、先生から色々聞かれます。私は、授業中のこうした質問にパッと早めに手を挙げる方だったので、瞬発力はまあまああるだろうと思っていました。しかし、いざ会話になると、質問されてから答えるまでの間が長いと指摘されてしまいました。私は何か言う前にじっくり考えてしまうため、質問されてから答えるまでの間に間があるようです。そして、外国人との会話の上ではそうした沈黙の時間はコミュニケーションの妨げになり良くないということを学びました。また、答えることと同様に質問もパッと出せるようにすることが大事だと感じました。留学中、ファシリテーターと話しているときや、マニラトリップに行ってガイドさんの話を聞いているとき、よく分からない内容が出てきても質問せず何となく流してしまうことがありました。そうすると、自分は次第に話についていけなくなり、相手もこちらがよく分かっていないことを察して困った様子になってしまいました。分からなかったらすぐ質問をしなければ、会話が難しくなります。また、何か質問はありますか、と聞かれたときに黙ってしまうと、相手の話に興味がない、あるいは話を理解していない、と思われると思います。英会話では質問にも応答にも瞬発力が大事だと思います。ただ、この3週間で英語を話すことに慣れ、少しずつではあるものの成長したと思います。今後、より瞬発力を上げるためには、会話を通してやりとりの速さに慣れること、「絶対に正しく言おう」「恥ずかしいから聞かないでおこう」、という意識を無くし、とりあえず何か言おうとしていくこと、常に準備をしておくこと、が必要だと思います。

英会話に関して2つ目に感じたのは、語彙不足です。少しずつ会話に慣れて、相手が何を言っているか聞き取れても、聞き取った単語の意味が分からなければ理解できません。私は留学前まで traffic という単語は「交通」という意味しか知りませんでした。しかし、フィリピンの学生さんと話していて、traffic には「渋滞」という意味があることを知りました。さらに、フィリピンの国立博物館で学芸員さんの話の中に「traffic animal」という単語が出てきて混乱し、後から traffic には「密売」の意味もあることを知りました。このように、知っている、見たことがある、と思っていた

単語ですら理解できない場面は留学中何度かあったと思います。また、聞くだけでなく話す際にも語彙不足を感じました。休日のトリップはどうだった? とファシリテーターや先生に聞かれた際に、自分が beautiful や delicious といった単語を何度も使っていることに気付き、もっと自分の経験を多様な表現で説明出来ればな、と感じました。こうした経験から、会話のレベルアップのためには語彙が必要だと感じました。その後、授業で beautiful の言い換えとして amazing や pristine という表現を、delicious の言い換えとして tasty, yummy, savory という表現を学んだので、今後機会があれば是非使っていこうと思いました。語彙を増やすには、コツコツと単語を覚え、使っていくしかないと思います。帰国後、私の英語学習のモチベーションは上がっており、受験の頃に使っていた単語帳を引っ張り出して少しずつ見たり、YouTube でも英語を聞いたりするようにしています。今後も単語学習継続していこうと思います。

英会話に関して、最後に、発音の重要性を改めて感じました。留学中の授業の最初の方では、発音を重点的に勉強します。英語を正しく発音するには口を大きく、そして普段動かさないところまで動かすため、大変です。また、会話の最中は話すことに意識が向き、発音がおろそかになりがちです。しかし、気を抜いて日本人英語で発音すると、相手に通じないことがかなりありました。Twelve や horse といった簡単な単語ですら、何度言っても通じないことがあり、驚いた記憶があります。私は最後まで、L と R、/a/ /ʌ/ /æ/等の発音が苦手でした。ただ、最後の発音テストでは、「real (L と R が混ざっているのが難しい) の発音がとてもクリアで良かった」と先生から褒めていただき、成長も感じました。発音に関しては、自分の発音と正しい発音を比較して練習すること、会話の瞬発力同様、常に意識し続けること、が今後必要なことだと思います。

ここで述べた以外にも、留学を通して得た素晴らしい経験と学びを挙げればキリがないです。最後になりますが、これほど多くの貴重な経験を与えてくださったフィリピンの方々、神戸大学の先生方、そして Batch 14 の皆さんに心より感謝します。ありがとうございました。



Opening Ceremony のあと講義棟と Oblation 像背景に(2月27日)

2022年度(派遣)「人生を変えるフィリピンでの経験」 応用植物学コース2年 N. N.

私がこのプログラムに参加したきっかけは友人から留学に行ったという話を聞いたことだった。異国での体験は日本とは異なる部分が多くとても新鮮で楽しかったと聞き、私もそのような体験がしたいと留学プログラムを探していた時に見つけたのがこの UPLB 農学英語コースだった。説明会でフィリピンの人々がとても話し好きで明るく親切であること、母国語ではないが英語を使う人が多く英語を教えるためのノ

ウハウが確立されていることなどを知り、とても興味を持った。私は元々人とのコミュニケーションが苦手だったので話すのが好きな人たちと長期間過ごしてコミュニケーション能力を伸ばすこと、また、日本の教育によって日本風の癖がついた英語の発音を改善することを目的にプログラムに申し込んだ。

実際にフィリピンに行って特に印象に残っていることは3つある。

1つ目は授業だ。どの授業でも自分で考えて発表、発言を求められる機会がとても多く、日本の大学の講義とは全く異なる雰囲気だった。もちろん授業は英語で行われるので、授業を受けているだけでも英語に慣れることができた。初日はゆっくりしゃべってもらっても聞き取るのが難しかった先生の英語が、最終日が近づくにつれてわかるようになっていって嬉しかった。授業の最初にはエクササイズがあり、簡単なダンスで体を動かしたり英語の歌を歌ったりすることで楽しく授業に向けて気持ちを切り替えて自然に集中することができた。初めは手をたいたりジャンプしたりといった体の動きを要求されることに戸惑ったが、回数を重ねるにつれて慣れてゆき、体を使って表現することの楽しさを知ることができた。授業中では隣の席の人とペアで活動したり4人組を活動したりと複数人で活動をする事が多かった。2人組で教科書の読み合わせをしたり、授業で習った表現を使って会話を作りそれをクラスメイトの前で発表したり、4人組を作って授業で習った表現を使ってちょっとした劇を作って発表したりした。このような活動によって自分とクラスメイトの英語を比較することができた。これは発音や発表態度のどこができていないのかを教えてもらったり、どうすれば改善するのかを自分で考えたりして、自分の能力を伸ばすための良い機会になったと思う。また、毎日席替えがあったので2人組や4人組のメンバーは日によって変わった。このことによってほとんどのクラスメイトと授業中に話すことができた。グループ活動の中には英語での自己紹介の練習や好きなものの紹介があったため、一緒に授業の課題を行うことで多くのクラスメイトと仲良くなることができた。会話や劇を作る過程では文法を確かめたり習った表現を使う場所が正しいのかを考えたりを繰り返すことで英語で文章を作る力を鍛えることができ、前で発表することで人前で話す経験を積むことができた。また、授業では発音についても学んだ。日本ではあまり教えられることのない正しい発音の仕方を母音、子音などごとに細かく分けて教えてもらうことができ、正しい発音のやり方がわかった。最終授業ではスピーチとパワーポイントプレゼンテーションを行った。この授業ではスピーチの際に人に内容を適切に伝えられる話し方や聞き手の興味を引く出だしやパワーポイントの作り方も学んだ。これらは英語での発表だけでなく日本語での発表にも生かすことができると思った。また、留学期間中何度も発表を繰り返すことで人前で話す経験を積むことができた。

2つ目は現地の学生さんとの交流だ。毎日の授業が終わった後に、担当の学生さんと2時間交流できる時間があつた。日本人4人とフィリピンの学生さん2人で1つのグループが生まれ、そのグループ単位でたくさん話をしたり現地のお店で買い物をしたりお茶をしたりした。現地の文化を教えてもらったり、学生さんのオススメのお店を紹介してもらったり、広い公園でゆっくりおしゃべりしたりするのはとても楽しかった。現地の学生さんとの交流の時間がこの留学の中で一番日本とフィリピンの違いを知り、また、一番英語を用いる機会が多い時間だった。フィリピンのことを知ることができたのは、街中を歩いている時に気になったものについてすぐに尋ねることができたからだ。車やお店などが日本とは全く様子が違い気になることがたくさんあつた。また、向こうの学生さんも祭りのことや言葉のことなど日本について知りたいことをたくさん質問してくれた。質問をしあうことで日本とフィリピンの文化の違いをたくさん見つけることができた。英語を話す機会が多かったのは、日本人4人に対して現地の方2人という人数構成だったため毎日2時間ほぼずっと英語を用いて会話をすることができたからだ。自分の言いたいことを自然と英語で考える訓練ができた。速いスピードで日常会話をすることで自分の知っている英単語で文章をすぐに構成する練習ができた。また、授業では習わないような自然な英語の表現も身につけることができたので良かった。同じグループだった学生さんとはフィリピンの話や英語の話だけでなく、家族の話や好きな人の話、将来の夢の話などプライベートな話もたくさんしたので3週間でもとても仲良くなることができた。初めて日本人以外の友達がで

きるという貴重な体験をした。学生さんたちとは留学が終わった後もラインやInstagramで連絡を取り続けている。

3つ目は様々な場所に観光に行ったことだ。キリストの像や動物の標本、古い浴槽やお墓、様々な文化圏の衣服などを見ることができるといえるヴィラエスクデーという観光施設や、フィリピンの歴史が学べるマニラの観光ツアーに行った。どちらの観光旅行でも大学周辺では見られないものがたくさん見られて楽しかった。ヴィラエスクデーでは聖書の一場面を表現した像がたくさんならべてあつたり、フィリピンの動物や虫、魚の標本がたくさんあつたり、古代の遺物がたくさん飾ってあつたりしたが、それらについての説明が書いた紙が近くに置いていなかったため、詳細は想像したり先生やガイドの人に聞いたりするしかなかった。しかし、展示物を見て色々想像することは自分の発想力を鍛える練習になったし、先生やガイドの人に聞く時にはもちろん英語を使わなければいけないので英語力を鍛える練習になった。楽しく観光をしながら英語力を伸ばすことができた。ヴィラエスクデーで最も楽しかったのはカラバウというフィリピンでよく農耕に使われている水牛がひく車に乗ったことだった。事前に大学のカラバウセンターでカラバウについての話を色々聞いていたので実際に仕事をしているカラバウを見られたのがとても嬉しかった。カラバウは10人程度が乗った車を特に苦でもなさそうにひいていて、動物が持つ力強さに驚いた。昔から牛が農耕に使われていた理由に納得したし、動物を利用した農業は機械に置き換えた方が効率が良いと思っていたが今後も機械が使えないような場所で農業を行う時には活用していくべきだと思えた。

マニラの観光ツアーでは古い教会や弾幕中に作られた壁、地下牢、フィリピンで有名な偉人であるホセ・リサルさんの記念館、豪邸、博物館を見に行った。古い教会には天使の人形が飾ってあつたり、浮き上がって立体的に見える絵画が壁に描かれていたり、シーサーのようなものが置いてあつたりしていた。豪邸には中国風の調度品など美しいものがたくさん置いてあつた。フィリピンは自然が美しい所であり優れた人工物があるイメージはあまりなかったが、芸術的に美しいものもたくさんあることがわかった。アジア風の芸術作品とヨーロッパ風の芸術作品が混ざっているのは色々な国の植民地だったことや昔から色々な国と交易を行っていたことが影響していると考えられ、文化以外で関係のあつた国が文化に及ぼす影響の大きさについて考えさせられた。戦時中の壁や地下牢の展示では、戦争の悲しさを目の当たりにし、二度と戦争は起こしてはいけないと強く思うことができた。ホセ・リサルさんの記念館では彼の多彩さに驚かされた。作家であり、実業家であり、画家であり、医師であり、革命家でもある彼の業績をまとめた記念館には彼の作品や生涯の情報の展示がたくさん飾ってあり、そのどれもがクオリティの高いものであり膨大な数であつたことから、彼の才能と努力に圧倒された。博物館ではフィリピンの独特な動物や植物をたくさん見ることができて、フィリピンの自然の多様さと美しさを実感することができた。

このように観光地の訪問ではフィリピンの自然と文化の多様な美しさや過去の凄惨な歴史について知ることができた。これはフィリピンという国を深く知るうえでとても貴重な経験になった。



このように様々な経験を通して英語能力、コミュニケーション能力を向上させ、プレゼンやスピーチの経験を積み、フィリピンについて知ることができた。この留学で得られた能力や知識は日本にいても研究室で外国の方と話すような海外の方と話す機会に活かしていけると思う。日本では英語を使う機会が留学中に比べて格段に減る

ので、留学で得た経験を失わないように英語を話せる機会を自分で積極的に見つけて参加していきたいと思っている。外国の文化に触れることで自身の視野を広げ、英語を身につけることで自分の将来の選択肢を広げることができるのでこの留学プログラムはとてもおすすりである。



Guided Interaction (GI) のひとこま

2021 年度 (オンライン) 食料環境経済学コース1年 M.F.

初めて UPLB 英語研修について知った時からぜひ参加したいと考えていた。英語のスキルを向上させることができることに加えて、大好きなフィリピンという国が関わっているプログラムだったから。私は高校生の頃フィリピンに行って以来、その土地と人柄に惹かれていた。もう一度その国へ行けるかもしれないと思うと心躍った。しかし、パンデミックの状況は好転せず、行くことができないとわかった時は非常に残念だと感じたが、オンラインコースとして実施すると知り、春休み期間中たるまないためにもいい機会だと考え、受講を決めた。

事前学習会で様々な立場の人からフィリピンについて、UPLB についてお話を聞くことができたのが良かった。特にタガログ語講座は実用的なものから面白いタガログ語を知ることができ、西嶋さんと桑田さんの体験談では実際に現地を訪れたときの楽しそうな様子や授業の様子を知ることができたのでとても良かった。このおかげで、GI の時間に聞くタガログ語の挨拶や、食べ物についてよりすんなりと頭に入ってきたと思われる。また、イヤホン、マイク調整は入念に行われ、正直ここまでする必要はあるのかと感じていたが、今、終わってみて必要なものだったと感じた。授業中に問題がおきずスムーズに受講できたのは入念な調整があってこそのものであった。事前学習会があったからこそ講義をより価値のあるものにできたと思う。

Ma' am Bestie の講義では発音、プレゼンテーションについて学んだ。Ma' am Bestie はとてもワフワフで優しい人で終始楽しく魅力的な授業を受けることができた。いつでも笑顔で拙い英語を理解してくださり、間違えても笑顔でポジティブに対応してくださったので積極的に挑戦することができた。授業で本題に入る前のウォーミングアップでのハッ! という発声練習はやはり印象的であった。英語は日本語より口を動かしたり息を吸ったりする必要があるということを実感した。I am good, people like me. I can speak English well. と自分に言い聞かせることも印象に残ったことの1つである。ポジティブなことを口に出すことで実際に気分が向上するものなのだとわかったので、落ち込んだ時や、発表前に実践したい。Ma' am Bestie の講義を受けて発音が良くなったかどうか、自分では判断しにくいのが、いかに発音が大切であるかを理解するようになり、以前より話すときに気を付けるようになったという変化が生まれた。今回は10日間、1時間半というとても短い講義だったので1つしかプレゼンテーションを見られなかったのは残念だった。非常に価値のある講義であった。

Ma' am Sarah の講義では自己紹介、道案内、レストランでのやり取りで使えるフレーズ、質問と回答の4トピックを学んだ。フォーマルな場面、インフォーマルな

場面での英語の使い分けを知ることができたのは今後英語を仕事や研究などで用いるときに有用である。この授業で印象に残ったアクティビティはトークショーである。台本を用意せず自由に相手について聞くことは難しく思えたがやってみるとそうでもなく、とても楽しいものだった。Ma' am Sarah は優しく穏やかな人で、間違えた答えを言っても一度 good answer などと受け入れてから問いを言い直してくれたり、他の角度から聞き直すことをしてくださった。間違っているよと言ったことは一度もなかった。これは印象に残ったことの1つである。間違えても自信がなくなることはなく、むしろこういふことか、と正しい答えを探して積極的に発言できたように思う。また、課題に対するコメントでは Good job だけではなく、どこがよかったのか、どこを直せばもっと良くなるのか、が具体的に書かれていて、次の課題はもっと頑張ろうと思った。こんなに具体的に褒められることは正直驚きだったが、とても嬉しかった。今後自分が評価する側にまわることがあれば実践したいことのひとつとなった。

また、講義全体を通して思ったことは、どんなことにも理由をつけることが自分の意見をより強力にすることができるということだ。先生からの質問では最後に、and why? と聞かれていた。これはあくまで私の感覚であるが、日本では授業などで意見を述べるときに理由を求められないことが多いと感じる。これから自分の意見には根拠を見つけ、それを基に発言したい。

GI の時間はどれも楽しい時間だった。Nathan はユーモアがあり、温かい人だった。折り紙の回ではいかに英語で説明するのが難しいことか、ジェスチャーが大切であるかどうかを学んだ。食べ物の回はジョリピーがフィリピンでどれほど人気店であるかを知ることができた。そのため、この2回は特に印象に残っている。

Zoom を用いて教室で集まって受講するというスタイルは非常に良かった。最終日、家で受けてみて感じたことは、疎外感と孤独感である。実際と同じ Batch の人と同じ教室で受けることは互いを高めあうためにも、英語の空気感を保つためにも、また、お互いに親睦を深めるためにも必要であったと考える。毎日替えるということは非常に良かった。毎回ペアやグループが違い、クラスを見る角度、当てられるタイミングが違い新鮮な気持ちで授業を受けることができたから。来年度もオンラインで行うならば、zoom 参加型の形を取るべきだと思う。そして、1つ来年度オン



Batch13(1年生)の受講風景 (B403 教室)

ラインコースを受ける学生にアドバイスするとするならば、アルバイトは入れない方が良いということである。これは、クローキングセレモニーで流す動画を準備する時間、次の日の授業のプレゼンの準備時間を十分に確保するためである。私はアルバイトを入れてしまっていて、次の日朝早く起きなければいけないにもかかわらず、準備が夜中までかかってしまい、金曜日にはかなり疲れてしまっていた。入れるとしても20時くらいまでをお勧めする。

2週間で季節は冬から春へと変わり、自分自身も英語に対する自信が付き、英語を話すことが楽しいとさえ思うようになった。たった2週間で変わるものなのだと実感できた。1つ希望を述べるとするならば、1日あたりの授業時間を伸ばしてほしいということである。プレゼンもいくつか見てもらいたかったし、いろんな場面で使う英語をもっと学べたらよかったと感じる。この英語研修をきっかけに英語を少し好きになれたので、この調子で TOEIC、TOEFL など取得できるものは挑戦し、英語を話す機会があれば可能な限り挑戦してみたいし、バンデミックが終われば留学へも行きたいと思う。自分の英語を話す姿勢は向上したとを感じるが、語彙力、文法力についてはまだまだ成長しなければいけない部分なので、その点に関して努力していく。

コロナ禍で大学生をしている身としては、学校へ行って、同級生と集まり、同じ教室で同じ先生から授業を受けるという経験自体が新鮮で楽しいものであり、加えて、魅力的な授業を受けることができたこのプログラムは貴重であった。2週間で密度の濃い、価値のある経験をできてよかった。関わってくださった方々に感謝の気持ちを伝えたいです。ありがとうございました。

2021 年度 (オンライン) 応用植物学コース 2 年 N.T.

実用的な英語を身につけたいと考えており、英語力を向上させることのできる機会を以前から探していた。そのため、大学入学時に UPLB での研修があることを知り、ぜひ参加したいと考えていた。コロナウイルスのため中止となったことを聞き残念に感じていたところ、オンラインコースがあるということを知りぜひ参加しようと思い、参加を決意した。実際にフィリピンに行くことができなかったのは残念だが、オンライン型講義により農の多い2週間で過ごすことができた。

事前学習会では、タガログ語や IRRi、フィリピンの文化について幅広く学んだ。UPLB とのオンラインコースが始まる前にフィリピンについての基本的な事項を学んだことで、GI においての話題が難らんだと実感している。フィリピンについて今までほとんど知らなかったため、とても興味深かった。特に興味深かったのは、石井先生ご夫妻からの Merienda や家族関係などのフィリピン特有の文化についての話や IRRi での研究についての話である。数回事前学習会を通して様々な方からフィリピンについて話が聞けたため、多様な角度からフィリピンについて知ることができて理解が深まったと感じる。事前学習会により、フィリピンに渡航してみたいという気持ちが高まった。

ZOOM での教室参集型講義は今回初めて経験したが、非常に有用な授業形態であると感じた。グループワークやペアワークなどは、教室において対面でできたため難なく授業内の活動を行うことができた。グループワークを対面で行えたため、グループ内でのディスカッションを円滑に行うことができ、さらには新しく友達を作ることでもできた。今回の講義は、パーティーや換気などにより感染症対策が万全に行われていたため、感染の危険性を最小限に抑えた上で教室参集の利点を最大限に引き出せていたのではないかと感じている。

講義では様々なことを学んだ。基礎から丁寧に教えていただけたため非常に実りある2週間であった。特に私にとって実用的であると感じたことは、Pronunciation Improvement and Presentation skills の授業において英語発音時の舌の位置を細かく学べたことだ。中学、高校と英語を学んできたが、そのような細かい発音の矯正をされたことがなかったため、発音の改善において大きな一歩が踏み出せたと感じている。また、最後の授業では、適切な発音やジェスチャー、分かりやすいプレゼンテーションスライドなど授業を通して学んだことを実践する機会としてプレゼンテーションを行ったことが特に印象的である。プレゼンテーションを行うことにより意思

表示する際の自分の英語力・表現力の長所と短所を明確に把握することができ、今後どのように改善してゆけばいいのかが方針が立ったため、非常に有意義な時間であった。私の場合は、特に子音の発音をより改善し、ジェスチャーをより効果的に使えるように努力する必要があると分かった。プレゼンテーションを通じて学んだ、自分の意見や思いを明確かつ印象的に相手に伝えるためにどのようなことに注意する必要があるのかという知識は、英語のみならず、日本語やその他の言語を話す際にも活けると確信している。Conversational Fluency and Vocabulary Enrichment の授業で印象に残っていることは、グループワークにおいてレストランの場面を想定し会話をしたことだ。初回のグループワークでは台本を事前に考え、台本通りのセリフを読むのが精一杯であったが、授業最終日には台本なしの自然な会話を英語で楽しめるようになっていた。このような成長が可能であったのは、授業内でグループワークなど英語を話す機会が多く与えられたからこそだと思う。

また、私が講義や GI において衝撃を受けたことの一つに、今のような感情なのかという問いかけが多く為されたことが挙げられる。日本での日常生活において、今のような感情か等といった、「感情」についてほとんど聞かれることがないため、なぜそのような問いをするのかと初め疑問と戸惑いを感じた。フィリピンの方からすると些細な質問なのだろうが、私にとっては慣れない質問であり、自分の感情を言葉で人に説明した経験が日本語においてもほとんどないため、初め私はその質問を苦手感じていた。しかし、毎日感情について問いかけられるうちに、今まであまり考えたことがなかった自分の感情というものに向き合うことができ、また、うまく表現できるようになった。自分の率直な気持ちを相手に言葉で示すことで、相手との距離が縮まり会話も弾むのだということに気づくことができた。自分の感情や考えを率直に表現できるようになったことは、今後の生活においても人とのコミュニケーションを円滑にする上で非常に活きるのではないかと考えている。

GI においては、特にフィリピンの文化について多くのことを学べたと感じる。私たちのグループでは特に食べ物のお話で盛り上がり、様々なフィリピン料理をファシリテーターの方に紹介していただいた。日本では考えられないような食べ物など驚きが大きかった。ファシリテーターである Joyce にフィリピンの家庭料理のレシピを教わり、家で実際に料理している。日本とは異なる魅力的な美味しさの虜になり、ここ数週間我が家の食卓にはフィリピン料理が多く並んでいる。このように渡航できないながらも、異文化と触れ合えたことは良い経験であったと感じている。視野が大きく広がったと確信している。GI ではフィリピンについて学んだだけでなく、日本の文化について紹介する機会も多くあった。そのため、日本の文化についても理解が深まったと感じる。海外の方と話すときには、自国の文化をよく知っておく必要もあると分かり、フィリピンと日本の文化の違いを比較するのは非常に面白かった。自国の文化に固執するのではなく、多文化について理解を深め受け入れていくことがグローバル化の進む現代では必要であると思う。今回の GI では、時間は短い上、リモートであったが、互いに文化を知り体験することができたのは大きな経験、学びになったと感じる。

上記にも述べた通りこの2週間で私は多くのことを学び、多くのものを得た。特に、私が確信を持ってこの2週間で変わったと言えることは英語を話す自信を得られたことだ。このコースを受講する前は、文法を間違えたらどうしようなどといった不安に駆られ、英語で会話することを躊躇っていた。しかし、このコースを経て自分自身の考えたことを自ら積極的に英語で発言できるようになった。このような成長が可能であったのは、先生方やファシリテーターの方が私の拙い英語を理解しようと努力してくれ、間違いも的確に指導してくださったからである。温かい指導のおかげで、例え間違っても言葉にしようとするのが重要なのだと気付かされた。また、国境を越えた友情を得ることができたことも見逃せない。初めての GI の時はうまく話せるのかと非常に緊張していたが、私たちのグループのファシリテーターである Joyce が親しみやすい雰囲気を作り、私の拙い英語を理解しようと努めてくれたおかげで緊張がほぐれ、気がつけば GI の時間を楽しみになっている自分がいた。楽しいだけでなく、多くの学びを得ることのできる時間であった。2週間という非常に短い期間ではあったが、濃密な時間を過ごすことができた。講義、GI 等含めて、有意義な2週間であったことは言うまでもない。

今後、今回学んだ様々な知識を復習することで身に付け、英語を用いてより流暢なコミュニケーションが取れるように努力を重ねたいと考えている。今後は、英語で会話やプレゼンテーションをする機会を探して積極的に参加しようと考えている。具体的には駐大阪・神戸アメリカ総領事館で行われる学生対象の英語ディスカッションに参加することだ。様々なことをこの2週間で学ぶことができたが、継続的に英語を使用しなければ学んだことを忘れていってしまうと考えられる。そのため、今後はこのような英語を実践的に使うことのできるイベントに参加することで、英語力を維持、そして向上させていくことが今後の目標である。また、他国の文化を学んだことで、多様な文化を学び受容していくことは、非常に興味深く、また意味のあることであると分かった。今後も、自国の文化に関心するのではなく、他国の文化に興味を持ち、積極的に学んでいきたいと考えている。

今年度はオンライン型で講義が行われた。実際に受講し、オンライン型講義は非常に利点が多かったと感じる。何よりも大きな利点だと感じていることはオンライン型では経済的負担がないことだ。以前から実際に現地に行って学びたいと感じていたが、実際に現地に行くとなると、渡航費は大きな負担となり、参加することを躊躇ってしまう。経済的観点からオンライン型講義は多くの人に英語を学ぶ機会を与えることができると私は考える。オンライン型への希望についてであるが、期間をより長くするべきであると感じる。今回は2週間と非常に短い期間であり、ようやく英語に慣れてきたと感じる頃に終わってしまった。2週間でも十分に学ぶことができたと感じてはいるが、少し短かったように感じる。また、GIの時間が1時間と非常に短く、話きれずじ時間切れになってしまうことが多かったため、GIの時間を少しでも伸ばすことができると感じる。フィリピンのファシリテーターの方とは遠隔のため、対面に比べ話しにくいことから時間を長くすると良いのではないかと感じた。そのような改善をおこなった上で、感染症が収束した後も多くの人に平等に機会を与えるためにオンライン型講義を続けるべきであると考えている。一方で、実際に現地に行って様々な経験をしたいという気持ちもある。派遣型の何よりの利点は現地で行って体験ができることである。そのため、感染症が収束し派遣型が早く再開されると良いと感じる。派遣型、オンライン型共に一長一短であると言える。そのため、感染症が収束した際には、派遣型とオンライン型の両方の選択肢を設けると良いのではないだろうか。具体的には、派遣型の方がUPLBを受けている講義をZOOMで神戸大学と繋ぎ、オンライン型で受講している人が教室に集参し現地型の人と同時間にZOOM受講するという形態だ。そうすることで、より多くの人に機会を与えられるのではないだろうか。

講義初日は、英語を話すことに自信がなかったため、英語を話すことに対する躊躇いと緊張があった。しかし、授業を通して私は英語での自然な会話を楽しめるまでに成長することができた。まだまだ流暢さには欠けるが、今回の講義を心に留めて今後も練習を重ねることで英語力向上に努めたいと考えている。コロナ禍であるにも関わらず、このような貴重な機会を与えてくださり、先生方には感謝の念に堪えません。ありがとうございました。



Batch12(2年生)の受講風景と閉講式のひとコマ(B401 教室)